

## 主 題：リフォーメーションの信仰

聖書箇所： 随所

1517年10月31日、今から500年前、マルティン・ルターは、当時のカトリック教会の教えに反対して、ドイツ・ウィッテンベルグ城内の教会の扉に「95箇条の論題」を掲示しました。一般的には、この出来事が「宗教改革（リフォーメーション Reformation）」の始まりと言われています。ちょうど、明後日で500年を迎えます。私たちは余りこのようなことを覚えることはありませんでしたが、500年を記念するこのときに、今一度私たちは、いったい何が起こったのか？いったい、何が彼らをそこまで駆り立てたのか？そのことを今日はごいっしょに見ていきます。

ルターがこの「95箇条の論題」を教会の扉に掲示するのですが、ルターをこのような行動に駆り立てたのは「贖宥状（しょくゆうじょう）」の制度でした。恐らく、多くの方々はよく使われる「免罪符」ということばの方がピンと来るかもしれません。同じことです。1515年に教皇（教皇はカトリックの司教団によってそう呼ばれるのですが、私たちは法王と言っています）レオ10世が「サン・ピエトロ大聖堂の建築」のために「免罪符」（贖宥状）の販売を始めたのです。（中世では、公益工事の推進のためによく免罪符が販売された。）この免罪符の販売が最も大々的に行われていたのが実はドイツでした。そして、それを推し進めていたのがアルブレヒトという一人の司教でした。

この人物はその当時マクデブルグ大司教位をもっていたし、また、ハルバーシュタットという所の司教位も持っていました。ところが彼はマインツの大司教位を欲するのです。彼はそれを手に入れるためにある秘策を講じるのですが、なぜ、彼がこのマインツ大司教位を欲しがったのと言うと、実は、マインツ大司教位は選帝侯、つまり、神聖ローマ皇帝を選べる権利を持つ有力諸侯だったからです。ですから、それ以外の司教よりもはるかに政治的な力を持っていたのです。そこで、アルブレヒトはマインツの大司教位を何とか手に入れようとするのです。

しかし、問題がありました。というのは、その当時、ローマ教皇庁は一人が複数の司教の位を持つことを禁止していたのです。そこで、アルブレヒトはある秘策を思いつきます。それは、複数の司教の位を持つために特別な許可をローマ皇帝レオ10世からもらうために献金をすることでした。お金をもって彼はこのマインツ大司教の位を手にしようとするのです。多額の献金を約束します。そして、その献金を集めるために彼が利用したのが「免罪符・贖宥状」だったのです。それによって多額の金を集めてそれを献金として渡し、その見返りとしてマインツ大司教の位を手にしようとしたのです。しかも彼は「サン・ピエトロ大聖堂建設」という名目でこの贖宥状・免罪符を販売したのです。

アルブレヒトはこの免罪符の販売を促進するために一人の人物を雇っています。ヨハン・ティツェルというドミニコ会のメンバーを雇い、彼に給料を与えています。彼は免罪符の売り上げを増大するために、高圧的な手段を用いて、罪人が免罪符を買いさえすればどんな重い罪でもそれに対する現世的な刑罰を免れることを約束するのです。また、遺族が免罪符を買うことで、煉獄にいるたましいの罪の償いを行えるとも教えました。煉獄とは天国でも地獄でもないその中間の状態です。このようなことを聞いたら、当然、人々はこの免罪符・贖宥状を買おうとします。こうして彼は多くの人々から多くの金を集めようとしたのです。

ルターはその免罪符の悪用に抗議をするのです。なぜなら、この免罪符購入による救いというのは行いによる救いであって、聖書の教えに反するというのを彼はこの95箇条に記したのです。このように書いています。「従って、教皇の贖宥によって、人間はすべての罰から赦免され救われると述べるあの贖宥説教者たちは誤っている。」と、彼は明確にそのことを記して教会の扉に張り付けたのです。「95箇条の論題」はドイツ語に翻訳されました。そして、その当時、活版印刷が開発されていたので、これは印刷されてドイツ中に大量に出回っていきました。しかも、このルターの考え方を指示する者が大量に起こって来たのです。

そして、このリフォーメーションはドイツで、その後、スイスで、イギリスでスコットランドでフランスで、そして、北欧へと広がっていくのです。彼らは、罪人の救いに関して、ローマカトリック教会の教えと実践に反対したので、彼らはスローガンを掲げました。その五つのスローガンを私たちは今朝、振り返るのです。なぜなら、このスローガンは彼らだけでなく、私たちひとり一人の信条そのものだからです。この五つのスローガンを見ると、まさに、これは私の信仰である、このことを私は信じているのだと、救われている皆さんは間違いなくそのように言うはずで、彼らはこの信条をいのちがけで守りました。これこそ神が教える真理だと言って、いのちを賭けてこのことを人々の前で明らかにしたの

です。今からそれを見ていきますが、まさに、ここに記されていること、彼らが教えたことを私たちも彼らと同じように、いのちを賭けて守らなければならない真理そのものだということが出来ます。

### ☆「救い」に関して、改革者たちが掲げていたスローガンとは？

1. Sola Scriptura : **聖書のみ** 聖書だけが私たちの最高の権威である
  2. Sola Fide : **信仰のみ** イエス・キリストを信じる信仰によってのみ救われる
  3. Sola Gratia : **恵みのみ** ただ神の恵みによってのみ救われる
  4. Sola Christus : **キリストのみ** イエス・キリストだけが私たちの主であり、救い主であり、王である
  5. Soli Deo Gloria : **神の栄光のみ** ただ神の栄光のためだけに生きる
- これらはすべてラテン語です。これが彼らのスローガンです。

#### A. みことば・聖書のみ (Sola Scriptura)

彼らが訴えたことは、この「聖書こそが最高の権威」だということ、そのことを明らかにしたのです。ルター時代、権威があったのは「教皇、法王」であり、また、「教会会議」と呼ばれるものでした。この当時、教会ではラテン語が使われていたため、聞いているほとんどの人たちは理解できていなかったのです。本来なら、教会において読まれるみことばを会衆が理解して、それによって霊的糧を得て一人一人が成長していくはずです。神のみことばの真理を聴衆が分かることばをもって語る必要があったのです。しかし、みことばを教える司教たちは聴衆が理解できる母語で話すべきところ、ラテン語で語っていた、そんな時代だったのです。

ですから、宗教改革に携わった信仰の勇者たちは、教会にとって、また、各信者にとって、聖書こそが最高の権威であって、法王よりも教会よりもここに権威があることを明らかにし、それだけでなく、聖書を聴衆が読めるように、彼らの母語に翻訳することに励んだのです。

**ジョン・ウィクリフ (1320年頃～1384年)** = ルターによる宗教改革が始まる前14世紀に、ジョン・ウィクリフがイギリスに誕生します。1382年、彼は「教会のかしらは教皇ではなくキリストである」として教皇の権威を攻撃しました。大変なことです。神のことばに権威がある、教会ではなく聖書こそ信者に対する唯一の権威であり、ローマ教会は新約聖書の教会を模範としなければならないと主張したのです。そして彼は、自分のことばで聖書が読めるようにと新約聖書を英訳するのです。もちろん、私たちが今読むような完璧なものではなかった。しかし、彼にはその願いがあったのです。人々は自分の母語で神のことばを見なければならぬと。

**マルティン・ルター** = 1521年4月16日、ヴォルムス帝国会議が開かれます。これについてはまた後で説明します。この議会の後、彼は友人たちによってヴァルトブルグ城に連れていかれ、そこで約10ヶ月間過ごします。その間、ルターは様々な本や小冊子を執筆します。そして、ドイツ語訳の新約聖書を何と11週間で仕上げるのです。先に話した通り、彼の時代にはグーテンベルグの活版印刷の技術がありましたから、ドイツ中にこの聖書が普及していくのです。そのことによって、カトリック教会の利権にまみれた権威が失われていったのです。

この後を続ける前に、このルターが教会に為したすばらしい功績を見ましょう。それは、礼拝での賛美をある一部の人たちから会衆に取り戻したことです。その当時、礼拝での賛美は専門的な合唱団が担当していました。ルターは礼拝において会衆が賛美することを重視して、礼拝での会衆賛美を奨励するのです。彼自身、様々な讃美歌を作词、作曲しています。先ほど私たちが賛美した「神はわがやぐら」も彼が作词したものです。約500年経っています。それを見るときに、確かに、詩篇46:1からのみことばを彼は読んで、そのみことばの真理が彼にあの詩を記させたと言えますが、彼らはどれ程大変な時代に、首が刎ねられるかもしれないときに、神に頼って生きることがどんなにすばらしいことか、その確信をもってあのような讃美歌を記したのです。私たち信仰者にとっての宝です、皆さん。

さて、先に話したヴォルムス帝国会議のこと、1521年4月16日に開かれます。でも、この議会にもうすでにカトリック教会から破門されていたルターが、自分の信仰を撤回するためにローマ皇帝カール5世によって召喚されたのです。このカール5世はその当時ヨーロッパで最も権力のある人物でした。その皇帝の前でルターは答えなければなりません。カール5世がこのようなことをしたのは、ドイツにはルターの支持者がたくさんいたので、彼らのことも考えてこのような機会を提供するのです。最も権力のある人物の前で自分はどんな答えをするべきか、もし、自分の信仰を撤回しなければこの場で首を刎ねられる可能性もあるのです。もうすでにカトリック教会から破門されていたのです。そこでルターが何と答えたのか？

「聖書のみことばか明白な根拠によって納得させられない限り、私は教皇や公議会の権威を受け入れ

ません。彼らは互いに矛盾したからです。私の良心は神のことばに捕らえられています。私は何一つ撤回できませんし、そのつもりもありません。良心に反したことをするのは正しいことでも安全なことでもないからです。神よ、私を助けたまえ。アーメン。」、これがヨーロッパで最も力のあった皇帝の前でルターが語ったことです。神のことばが私の心をつかっていると。ルターがはっきり彼らの前で宣言したことは、「私には神のことばが最高の権威であって、これに私は従う」とそれが彼の告白だったのです。もちろん、彼はこの皇帝カール5世によって「最も悪名高い異端者」として後に帝国を追放されるのです。皆さん、想像できますか？ヨーロッパを支配していた権力者の中で、「お前が信仰を捨てるか、私がお前のいのちを取るか」という選択を迫られたときに、ルターは神のことばを、神の真理を取ります。

◎その理由：聖書が最高の権威としたのは？それが…

### 1) 神のことばだから

彼がどうして「聖書のみ」と言ったのか？これが神のことばだからです。そして、その理由を私たちもよく知っています。私たちもなぜ、このルターたちと同じように聖書こそが最高の権威だと信じるのか？それは、これが「神のことば」だからです。私たちが手にしているのは、人間のだれかが書いたものではありません。神ご自身が私たちに与えてくださったものです。だから、この聖書の中に、どうすれば「救い」を得ることができるのか？人間には不可能なことですが、どうすれば救いに与ることが出来るのかという神の教えが記されています。

・救いを得る方法を教えている：ヨハネはこう記しています。ヨハネ20：31「しかし、これらのことが書かれたのは、イエスが神の子キリストであることを、あなたがたが信じるため、また、あなたがたが信じて、イエスの御名によっていのちを得るためである。」と。5：39には「あなたがたは、聖書の中に永遠のいのちがあると思うので、聖書を調べています。その聖書が、わたしについて証言しているのです。」とあります。どうすれば罪の赦しを得ることができるのか？どうすれば永遠のいのちを得ることができるのか？我々人間が知らなければならない最も大切なメッセージがこの中に記されているのです。Ⅱテモテ3：15にも「また、幼いころから聖書に親しんで来たことを知っているからです。聖書はあなたに知恵を与えてキリスト・イエスに対する信仰による救いを受けさせることができるのです。」とあります。あなたが信仰に与ったのはこの聖書のみことばを通してでしょう。みことばが開かれて、みことばから神のメッセージが語られて、そして、神があなたの心に働いてあなたを救いへと導いてくださったからです。

・私たちの誕生の目的と存在の意義を教えている：また、この聖書を通して、なぜ私たちがこの世に誕生し、なぜ生きているのか？目的とその存在の意義がこの中に記されています。パウロはこのように言っています。コロサイ1：16「なぜなら、万物は御子にあって造られたからです。天にあるもの、地にあるもの、見えるもの、また見えないもの、王座も主権も支配も権威も、すべて御子によって造られたのです。万物は、御子によって造られ、御子のために造られたのです。」、私たちはだれのために造られ、だれのために生きているのか？みことばが私たちに教えることは、私たちは主のためにイエスのために生きている、そのために造られた、そのために救われた、そのために生かされているということです。聖書を見るときに、このように大切な真理が教えられるのです。

・どのように生きるのかを教えている：どのように生きていくのが神の前に正しいのか？その生き方についても教えてくれます。Ⅱテモテ3：16-17に「16 聖書はすべて、神の靈感によるもので、教えと戒めと矯正と義の訓練とのために有益です。17 それは、神の人が、すべての良い働きのためにふさわしい十分に整えられた者となるためです。」、ですから、救いに与るだけでなく、救いに与った私たちはどのように生きていけばいいのか？それを教えてくれるのはこの聖書だと言うのです。ローマ15：4には「昔書かれたものは、すべて私たちに教えるために書かれたのです。それは、聖書の与える忍耐と励ましによって、希望を持たせるためなのです。」と書かれています。

なぜ、私たちはこの権威に従うのか？この権威を最も敬うのか？神のことばだからです。

### 2) 真理だから

同時に、聖書は真理だからです。イエスがこのように言われました。ヨハネ17：17「真理によって彼らを聖め別ってください。あなたのみことばは真理です。」と。詩篇119：160にも「みことばのすべてはまことです。あなたの義のさばきはことごとく、とこしえに至ります。」とあります。新約も旧約も私たちに教えることは「神のおことばこそが真理」だということです。皆さんが真理を知りたければ、聖書に行くことです。

宇田進という先生がこのようなことを記しています。「今日、教会における“聖書の不可思議な沈黙”ということが指摘されつつある。だが、聖書の権威が地に落ち、「主のみことばを聞くことのききん」(アモス8：11「見よ。その日が来る。——神である主の御告げ——その日、わたしは、この地にききんを送る。パンのききんではない。水に渴くのではない。実に、【主】のことばを聞くことのききんである。)」が起こるときに、教会の中に何が結果するのであろうか？それは、説教の弱体化であり、教会教育の崩壊であり、信仰のやせ細りであ

り、信徒の聖書研究熱の低下であり、宣教の情熱の喪失である。いや、それ以上に、福音の中心であるイエス・キリストご自身が見えなくなるという最も重大な事態が発生するのである。これは約2000年に及ぶ教会の歴史が教える明確な法則である。今こそ神の民は、16世紀の宗教改革がいのちがけで打ち立てた「聖書のみ」という大原則が意味するところに注目すべきである。…教会は常に神のことに立ち返り、それを規準として誤りを正すとともに、みことばと御霊とによる霊的な刷新とリバイバルを求めなければならないのである。」＝（宇田進、現代福音主義神学 p.240-241）

まさに、このとおりです。時代がどうあれ、なぜこの人たちが命懸けでこのみことばの權威を認め主張したのか？神のことにだからです。皆さん、リフォーメーションはまだ終わっていないのです。今も、私たちの周りで、神の真理を正しく伝えていない集まりが存在しています。私たちはそれがどの教会なのか、どの集まりなのかを調べる必要はありません。しなければいけないことは、私たちがしっかりとこの聖書が教えてくれることを信じてそれに従うことです。この聖書の權威をしっかりと認めることです。これだけが神のおことばです。そして、私たち被造物はこの神のことに従う者として造られたのです。そして、生かされているのです。

私たちの教会は感謝なことに、あの有名なダラス神学校の教理声明文を日本語に翻訳されたものを使っています。非常に珍しい教会だろうと思います。最初のときから教理を大切にしましたのです。悲しいことに、今、多くの教会が教理を捨てています。あるとき、私はこんな質問をしました。「素晴らしい教理だけれど、もし、教理と聖書の中に矛盾が生じたら私たちはどうするのか？」と。そのときの答えのひとつは「教理を重んじるべきだ」でした。私たちの教会でもそうだったのです。私たちが答えるべきは「教理が何と言っているかと神のことに従います」です。それが私たちの信仰です。その信仰をあなたは持っているはず。そして、その信仰のためにこの宗教改革者たちはいのちを捨てたのです。

私たちの權威は教会でもなく、人間でもなく、神のことにあります。これが私たちの教会の「いのち」であり、そして、私たちはそれにコミットしたのです。それに献身するように、それに専心するようにと私たちは決心したのです。

## B. 信仰のみ (Sola Fide )

二つ目は「信仰のみ」です。ルターはドイツ語訳の新約聖書を出したと先ほど話しました。ローマ人への手紙3：28に「人が義と認められるのは、律法の行いによるのではなく、信仰によるというのが、私たちの考えです。」と書かれています。ここにルターは「のみ」ということばを加えたのです。ですから、彼はこのように訳したかったのです。「人が義と認められるのは、律法の行いによるのではなく、信仰によってのみ、…」、あるいは、「…信仰のみによる」、これが彼が言いたかったことです。なぜなら、それこそが聖書の教えることだからです。

同じローマ4：5には「何の働きもない者が、不敬虔な者を義と認めてくださる方を信じるなら、その信仰が義とみなされるのです。」とあり、私たちがどんなに努力をしようと、神の要求しておられる聖さにはだれも達することができない。神を満足させるような正しい聖い行いを実践することはできない。そのように不敬虔な神のさばきを受けて当然の私たちを、神はあわれんでくださって、神を信じようとする者を救おうとしてくださったのです。その救いに与るのは「信仰のみ」です。ガラテヤ2：16にも「しかし、人は律法の行いによっては義と認められず、ただキリスト・イエスを信じる信仰によって義と認められる、ということを知ったからこそ、私たちもキリスト・イエスを信じたのです。これは、律法の行いによってではなく、キリストを信じる信仰によって義と認められるためです。なぜなら、律法の行いによって義と認められる者は、ひとりもないからです。」と書かれています。

## C. 恵みのみ (Sola Gratia)

カトリック教会はミサに出席することの大切さを教えます。ミサとは「神の怒りを真に宥める」と教えました。また、ミサによって神は恵みと後悔の賜物、私たちの失敗を赦し、どんなに大きな罪も赦してくださると教えたので、それを聞いた人たちは当然、「では、ミサに出席しよう」と思ったはず。ところが、この宗教改革者たちは「聖書の教える救いは、信仰により恵みによってのみ救われる」ということを教えました。

よく皆さんも知っている箇所ですからもう復習に過ぎないのですが、エペソ2：1-9をご覧ください。「：1 あなたがたは自分の罪過と罪との中に死んでいた者であって、：2 そのころは、それらの罪の中にあってこの世の流れに従い、空中の權威を持つ支配者として今も不従順の子らの中に働いている霊に従って、歩んでいました。：3 私たちもみな、かつては不従順の子らの中にあって、自分の肉の欲の中に生き、肉と心の望むままを行い、ほかの人たちと同じように、生まれながら御怒りを受けるべき子らでした。」、だれ一人として私たちは例外なく神の救いに与る資格はないということを教えています。私たちは生まれながらに神に逆らっているからです。神を愛するよりも罪を愛して罪に従うことを選択しているからです。その上で、神はそんな私たちに豊かなあわれみを示してくださったのです。「：4 しかし、あわれみ豊かな神は、私たちを愛してくだ

さったその大きな愛のゆえに、:5 罪過の中に死んでいたこの私たちをキリストとともに生かし、——あなたがたが救われたのは、ただ恵みによるのです——:6 キリスト・イエスにおいて、ともによみがえらせ、ともに天の所にすわらせてくださいました。:7 それは、あとに来る世々において、このすぐれて豊かな御恵みを、キリスト・イエスにおいて私たちに賜る慈愛によって明らかにお示しになるためでした。:8 あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。それは、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。:9 行いによるのではありません。だれも誇ることもないためです。」、こうしてみことばははっきりと私たちが救いに与ったのは神の恵みだけだということを明らかにしています。

#### D. キリストのみ (Sola Christus)

四つ目に言うことは「キリストのみ」、神と人との仲介者はイエス・キリストしかいないのです。我々罪人が救われるために与えられた救い主はキリストしかいない、キリストのみだということを彼らは明らかにするのです。というのは、ローマカトリックにおいては、煉獄という、最初にも話したように天国でも地獄でもないその中間に位置するものがある、そこに拘留されている人たちは忠実な者たちの祈りによって助けられると教えていたのです。ですから、死んだ後も救いのチャンスがあったのです。天国に行けるチャンスがあると。

みことばが教えることは、この地上での生活が終わればその後悔い改めの機会はないということです。今、私たちがこの地上にいるその間のみ、私たちはこの救いに与るのです。ある人たちは言います。どんな宗教を信じていても行き着くところはみな同じだと。確かに、人間はそう言うでしょう。でも、神はそう言うおられません。唯一の救い主がイエス・キリストであることを明らかにしています。使徒の働き4:12には「この方以外には、だれによっても救いはありません。天の下でこの御名のほかに、私たちが救われるべき名は人に与えられていないからです。」と書かれています。自分が救い主だということは自由でしょう。でも、神が送ってくださった救い主はただ一人しかおられません。それはイエス・キリストであるとみことばは明確に教えています。

そして、イエスはこのように言われました。ヨハネ14:6「イエスは彼に言われた。「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません。」と。このようにイエスご自身もはっきりとそのことを言われています。「わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません。」と、つまり、この父なる神と和解するためにはイエス・キリストを通らなければならないのです。私たちの罪が赦されるためにはこのイエス・キリストでなければならないことを明らかにするのです。1テモテ2:5、6にも「:5 神は唯一です。また、神と人との間の仲介者も唯一であって、それは人としてのキリスト・イエスです。:6 キリストは、すべての人の贖いの代価として、ご自身をお与えになりました。これが時至ってなされたあかしなのです。」とあるとおりです。

今、私たちが見て来たのは、「信仰のみである、恵みのみである、キリストのみである」と、救いはまさにこれであると教えるのですが、

**\* これらの信条はルター自身が経験したことであった。**

ルターがどのように救いに与ったのか？非常に興味深いです。聞いてみてください。

**ルターの回心** : 彼は1483年11月10日にドイツのアイスレーベンという小さな町に生まれています。彼の両親は農夫でした。幼いころからルターは大変厳格な教育を受けて育ちました。彼はエルフルトの大学で文学士(1502年)と文学修士(1505年)の学位を授与されています。大変優秀でもあったので、彼の父親はルターに法律の道を進むようにと勧めます。そんなある日、彼はエルフルト近くで激しい雷雨に遭遇し、彼の立っていた傍に雷が落ちるのです。その恐怖の中で彼は聖アンナに次のような祈りをささげたのです。「もし私が助かったなら私は修道士になります。」と。そして、その通り、3週間後、彼はエルフルトのアウグスチヌス会の修道院に入ります。

修道院に入って彼が教えられたのは「救いの道は困難だけれど不可能ではない」ということです。ルターはキリストの功績無くしては天国には決していけないことを知っていながら、自分で功績を得なければならないとも信じていました。神の恵みにふさわしい者となるためには全力で宗教を追求することが必要だと考えました。そこで彼は様々なことを熱心に行うのです。

ルターはこのように考えました。神の恵みにふさわしくなるために、自分は修道士であったので、僧衣(修道士が来ているフード付きの衣服)を着たまま死ぬことができれば、神の優遇措置を受けて自分のたましいを救うチャンスがあるのではないかと考えました。そこで彼は救いの恵みによって死を迎えようと過酷な苦行を自らに課したのです。ルターは大変な苦行を積むのです。

彼は自分が聖人の道を歩んでいるという確信をもっていました。しかし、彼の心と思いはそれに反して日に日に悩みが増していったのです。彼が司祭として最初のミサを行ったとき、ちょうど、イスラエルの民が「契約の箱」の前で神を恐れた、その神に対する聖い恐れを彼自身経験しました。ルターは完全さを求めてあらゆることを行いました。彼の友人たちがルターは餓死するのではないかと心配するほ

ど断食を繰り返し、修道院の規定をはるかに超えた徹夜や徹夜の祈り会を頻繁に行いました。肉体を苦しめるために、毛布を掛けずに眠ったり、屈辱を味わうために物乞いも経験します。しかし、彼の問題は、このようなことを行っても「神を満足させること」ができなかったことです。

そんな中、ルターにローマに出かけるチャンスが与えられます。1300キロの丘陵地や森などの道のりを往復3か月掛けて旅しました。ルターがローマに行った一番の関心事は「救いの道」をローマで発見することでした。彼は滞在中、様々なところでミサに出席します。また、ある時ルターは、スカラ・サンタという聖なる階段を上ろうとします。彼は煉獄から自分のたましいを救い出すことを願いながら、その希望をもって、一段上るごとに「主の祈り」を唱え、階段に口づけしながら上っていくのです。そして、その階段を上り終わったときに彼は「救い出されることをいっただれが知り得るか」と自問するのです。救いの希望をもって訪れたローマが道徳的に墮落し、悪行が広がっていることを目の当たりにしたルターは、ローマで救いを見つけることができなかった今、どこへ行けばいいのかと途方にくれるのです。

「天国に行くためにはどれほど完全でなければならないのか?」、この質問こそルターを悩ませ続けるものでした。「神が要求する完全さを得ることに失敗している」と、彼の良心は繰り返し彼の心を責め続けました。そんな中、ルターの修道院時代の師であったヨハン・シュタウピッツから、1511年ウィッテンベルグに誕生した新しい大学で教鞭をとることを勧められ、哲学の教授になります。シュタウピッツは、ルターが抱える救いの疑問に答えを見つけるためには、哲学ではなく聖書を教えることを助言しました。そして、1513年、ルターはこの大学で聖書を教え始めるのです。最初に彼が教えたのは詩篇です。そして、詩篇22篇1節に来たときに「わが神、わが神。どうして、私をお見捨てになったのですか。」というみことばに触れて、「主イエスご自身が神に見捨てられた」という事実が彼にある種の安心感を与えました。自分だけじゃない、イエス・キリストも神から見捨てられたのだと。そして、彼はこう考えます。「これこそ、鞭打ちよりも、いばらの冠よりも、そして、釘よりも酷かったに違いない」と。そして、ルターはそのとき、キリストがこのことを経験されたのは、私たちの罪を彼が担われたからだということを知るのです。

そして、詩篇の後、彼はローマ書の講解を始めます。1:17にある「神の義」ということばを見たときに彼は震えを覚えます。なぜなら、この義なる聖なる神の前に立つことのできる罪人はどこにも存在しないので、神の前では我々のような者はすべて取り除かれてしまうということを知っていたからです。彼は「神の正義」と、また、「義人は信仰によって生きる」というローマ1:17のみことばの関連について悩み続けます。日夜、考え巡らせていました。それが理解できなかったのです。また、ローマ4:5に「何の働きもない者が、不敬虔な者を義と認めてくださる方を信じるなら、その信仰が義とみなされるのです。」ということばにも心をひかれました。

そして、ついにルターは「神の正義」と「義人は信仰によって生きる」との関連をやっと理解できたのです。ルターは次のように記しています。「私は、神の正義とは、恵みと信仰によって私たちを義とくださる神の完全なあわれみによる義であることが分かった。」と。つまり、神の義は神の属性を示すだけでなく、罪人に対する神からの賜物であることを理解したのです。

思い出してください、皆さん。私たちが「転嫁」ということを学んだときに、神と私たちはある意味でトレード（取引、交換）したわけです。神は私たちから私たちのすべての罪を取られました。それをイエスが私に代わって受けてくださったのです。そして、それと交換にイエスが私にくださったものはイエスご自身の義です。私の罪をイエスに渡し、そして、イエスから私はイエスの義をいただいたのです。これが救いなのです。ルターはそのことに気付くのです。「神の義」ということばに彼は恐れしました。義なる聖い神の前で私のような罪人は滅ぼされてしまうと。しかし、みことばによって彼は気付くのです。神がくださる救い、それはこの「神の義」が私に与えられることだと。

行いによって救いを得ようと努力したルターが辿り着いた結論はこういうことです。「救いは主イエス・キリストを信じる者に、神の義が与えられる神の恵みである」と。そう思いませんか、皆さん。あなたの罪を赦してくださること、あなたを新しく生まれ変わらせてくださること、あなたが神の前に立つことができる義なる者としてくださること、これらはすべて、あなたの功績によるのではない、神の一方的な恵みだと言います。そして、このすばらしい祝福に与るのは、あなたがこのイエス・キリストをあなたの救い主と、あなたの神と、あなたの主と心から信じて、この方を受け入れることです。ルターはそのことが分かったのです。それゆえに、彼はこうして「信仰のみ、恵みのみ、キリストのみ」と歌ったのです。

#### E. 神の栄光のみ (Soli Deo Gloria)

聖書は私たちに「神とは主権者である」ということを教えます。主権とは「他国の意志に左右されず、自らの意志で国民、および、領土を統治する権利。国家構成の要素で最高、独立、絶対の権力。国家の

意思や政治のあり方を最終的に決定する権利。」と定義します。ですから、主権者は一番上にあり、自分の思うとおりに事を為していくのです。神はそのようなお方であると、彼らはしっかりと認識しているのです。神は私たちのことを「友」と呼んでくださったと言います。でも、信仰者の皆さん、この方は神であられるのです。私たちが失ってはならないのは、神に対する当然持つべき畏敬の念です。この方は神なのです。我々を造られた方はすべてを治めておられる主権者なのです。この方は絶対者なのです。この方が為すことは常に完全なのです。そして、私たちはこの方に造られた者として、この方に従うことが私たちの生き方なのです。それが私たちの人生です。

ですから「神の栄光のために」と言うとき、私たちは私たちが造ったくださった方のために忠実に従うのです。そのときに神の栄光が現されるからです。パウロはIテモテ6：15で「その現れを、神はご自分の良しとする時に示してください。神は祝福に満ちた唯一の主権者、王の王、主の主、」と呼んでいます。この方が絶対者です。この方が言われたことに従うのです。この方が主権者だからです。私たちは「主イエス・キリスト」と言います。何を言っているのか？「この方が私の主人である。この方が私の主権者である。」ということを告白しているのです。もし、従いたくないのであればそのようなことを言うべきではありません。あなたの主であるなら、当然、そこに要求されているはこの方に対する従順な歩みです。パウロはこう言っています。Iコリント6：20に「あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。ですから自分のからだをもって、神の栄光を現しなさい。」と、同じIコリント10：31にも「こういうわけで、あなたがたは、食べるにも、飲むにも、何をするにも、ただ神の栄光を現すためにしなさい。」、ローマ11：36「というのは、すべてのことが、神から発し、神によって成り、神に至るからです。どうか、この神に、栄光がとこしえにありますように。アーメン。」と。

皆さん、もう気付かれたでしょう。救いに与った私たちは何のために生きているのか？私たちを救ってくださった主権者なる真の神の栄光のために生きるのです。そのために私たちは、神が与えてくださった、教えてくださったみことばに従って行こうとするのです。私たちはどんな時でも神に喜ばれることが何かを考えてそれを選択して、そのように生きていこうとするのです。感謝なことに、そのような歩みのため神は十分な助けを私たちに与え続けてくれます。こうして生きるのだと教えるのです。

500年前、我々の信仰の先輩たちは、この我々の信仰を皇帝の前で、人々の前で明らかにしたのです。これが我々の信仰なのだ、これを我々は信じている、我々はこのように生きているのだと。500年を迎える今、私たちが考えなければいけないことは、我々の信仰がどうか？です。我々の歩みがどうか？です。このような確信を持って私たちが歩み続けているのかどうか？です。

信仰の勇者たち、様々な名前が挙がって来ますが、最初にジョン・ウィクリフのことを話しました。彼はルターの遥か前の人です。イギリスにあって彼は大きな働きをしました。そして実は、そのウィクリフから大きな影響を受けたのが、チェコのプラハ大学の学長であったヨハン・フスです。

ヨハン・フス (1369年頃～1415年7月6日) : 1414年から1418年まで続いたドイツのコンスタンツで開催された「コンスタンツ公会議」において、このフスにもウィクリフと同じように異端者として有罪判決が下ります。ウィクリフの思想を排斥し、そして、フスを焚殺(ふんさつ、火で焼き殺すこと)ことが決まりました。フスは6ヶ月間牢屋に入れられて、模擬裁判を受け、改宗を命じられます。それを拒んだフスは1415年7月に、首には丁度犬のように鎖を付けられて殺されていきます。火あぶりの刑です。身ぐるみ剥がされ、悪魔が描かれ「最高の異端者」と書かれた「バカ帽子」(昔、出来の悪い生徒がかぶらされた帽子)をかぶせられました。そして、杭に縛られ、炎が高く燃え上がる時、その苦しみの中で彼は一言も不平不満を言うことなく、神を賛美しながら天へと凱旋して行きました。

彼はこのように言っています。「あなたがたはこのガチョウ(名前のフスはチェコ語で鷲鳥の意味)を料理することができる。しかし、これから1世紀以内に勝利する白鳥が現れるだろう。」と、フスはこんなことを15世紀の初めに人々の前で明らかにしたのです。そしてそのとおり、1世紀後、ある人物が登場したのです。フスが殉教してから102年目に、マルチン・ルターが教会の扉に「95箇条の論題」を張付けたのです。私たちの信仰の先輩たちはいのちを賭けてこの真理を守り続け、語り続けたのです。この真理のために喜んでいのちを捨てていきました。今、私たちは彼らと同じ思いを共有しているでしょうか？

主イエス・キリストを捕らえるために、律法学者や祭司長たち、また、この世の宗教家たちは義人を装った間者をイエスのもとに送ります。ルカ20：21に書かれています。彼らがイエスのところに行ってイエスについて話すのですが、彼らは非常に興味深いことを口にしていきます。「その間者たちは、イエスに質問して言った。「先生。私たちは、あなたがお話しになり、お教えになることは正しく、またあなたは分け隔てなどせず、真理に基づいて神の道を教えておられることを知っています。」と。「あなたがお話しになり、お教えになることは正しく、」と、もちろん、彼らはそのことを信じていません。でも、彼らが言ったこと

は事実です。主イエスが教えておられることは正しかったのです。「分け隔てなどせず、真理に基づいて神の道を教えておられる」と。

皆さん、考えてください。主イエスは真理に基づいて神の道を教えたのです。イエス・キリストは神の真理を語り続けたのです。だから、彼は神の栄光を現し続けた。まさに、これは私たち一人ひとりの信仰者の生き方ではありませんか？私たちがこの地上にあって、このすばらしい祝福に与っている者として、私たちに必要なことは、私たちもこの信仰の勇者たちと同じように、もっと言えば、私たちの愛する主と同じように、この神の真理に立って生きることです。この真理を神のあわれみをいただきながら実践して、神の栄光を現しながらこの地上での生活を全うすることです。違いますか、皆さん！

それが500年経った、信仰の勇者たちが私たちに語り続けてくれること、チャレンジしてくれることではないでしょうか？私の信仰はどうなのか？そのことを自分に問い掛けなければいけません。私はどのように生きているのか？この主の恵みに対して私はどのように答えているのか？…と。

私たちはこの後聖餐式に与ります。一人ひとりが考えなければいけないことは「私はイエス・キリストを信じる信仰によって、神の一方的な恵みによってこのすばらしい救いに与った。神の栄光を現すその目的のために生きることができる者として生まれ変わった。問題は、そのように私が生きているかどうかです。このみことば、神がくださったおことばを最高の権威とし、何があってもこのみことばに従うという信仰を持って生きているかどうか？」ということです。

このとき、一人ひとりの信仰を吟味するすばらしい機会だと思います。その吟味をもって主のテーブルに着きましょう。